

<卒論>当て字について

| | |
|-----|---|
| 著者 | 伊藤 光子 |
| 雑誌名 | 日本文学誌要 |
| 巻 | 62 |
| ページ | 80-89 |
| 発行年 | 2000-07-08 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/00020124 |

当て字について

伊藤 光子

―はじめに―

◆当て字をテーマにした理由

以前、私は本屋で「伝染^{うつ}るんです。」という題名の漫画を見つけた。「伝染^{うつ}る」と書いて「うつる」と読むとは、その時まで考えたこともなかったので、印象深かった。これが、私が当て字に興味を持ったきっかけだと思う。それから、どのようなジャンルの小説を読むときでも、漢字の使い方や当て字を意識して読むようになった。当て字を独自のルールを作って使用している作家もいることを知り、更に詳しいことを調べるため、今回、当て字をテーマとして扱うことに決めた。

調査した作家は、夏目漱石、森鷗外、そして司馬遼太郎の三人である。夏目漱石の小説は、当て字が多いように思われたので、調べることにした。夏目漱石と比較するために、同じ明治時代の作家である森鷗外の小説も調査した。司馬遼太郎の小説は、前述の二人の作家とは時代が違うので、当て字にも違いが

あるかと思い、調べてみた。

◆当て字の定義

①漢字を本来の用法とは関係なく、単にその音や訓をあてて使うこと。また、その漢字。アメリカを「亜米利加」、やたらを「矢鱈」と書く類。

②漢字のでたらめな使い方。また、その漢字。

〈参考〉 熟字訓(ここでは、熟字訓も当て字として扱っている。) 熟字訓とは漢字一字一字の音・訓に関係なく、二字以上の組み合わせ全体を一語としたそれに当てた訓。「昨日(きのう)」「土産(みやげ)」「五月雨(さみだれ)」などの類。

◆扱った作品

夏目漱石

吾輩は猫である／行人／虞美人草／こころ／坊ちゃん

森鷗外

舞姫／阿部一族／うたかたの記／鶏／かのよ
うに

司馬遼太郎

燃えよ剣（上・下）／新撰組血風録

―注意事項―

I、明治時代と現代で、ルビの書き方にゆれがある場合、現代の書き方に統一した。

II、以下の文では、二字以上の漢字を組み合わせたものを、熟語。日本固有の言葉を大和言葉と呼んでいる。

III、まとめた資料は、項目ごとに、その一部を例として提示している。提示できなかった資料は、数をカウントし、提示した資料との合計数を、計 ○○○ 例 と表記した。

IV、項目四、五、六の資料にある（ ）内の漢字は、現在一般的に使われているもので、作品中で使われている漢字との比較のために、書くことにした。羅馬：ローマ

一、国名や都市名

〈三人合計〉

計 二四 例

希臘：ギリシャ
和蘭：オランダ
波欺：ペルシャ
伯林：ベルリン
埃及：エジプト
倫敦：ロンドン

羅馬：ローマ
英吉利：イギリス
葡萄耳：ポルトガル
欧羅巴：ヨーロッパ
亜米利加：アメリカ
独逸・独乙：ドイツ

作者による表記の違い

イタリア 以太利・以太利亜（夏目漱石の作品）／伊太利
（森鷗外の作品）

パリ 巴理（夏目漱石の作品）／巴里（森鷗外の作品）
（現在、一般的に使われている当て字は、両方とも森鷗外の方である）

〈司馬遼太郎〉

・大阪湾：ちぬのうみ（茅渟海）

和泉と淡路の間の海の古称。現在の大阪湾一帯。

・北海道：えぞち（蝦夷地）

明治以前の北海道・千島・樺太の総称。また、特に北海道のこと。

夏目漱石と森鷗外の作品が書かれた明治時代には、国名に当てる漢字が、ほぼ決まっていたと見ていいだろう。*作者による表記の違い*を見ると、夏目漱石の方が、現代には残っていない漢字の使い方をしている。夏目漱石が独自に作っていたのか、それとも当時、そのような漢字が一般的に使われていたかはわからない。だが、森鷗外は、現在でも国名に使われている漢字だけを用いている。このことを考えると、夏目漱石が独自に作っていた可能性が高い。ただし、国名に当てる漢字は、その国名の読み方に、漢字の音を合わせて作られているものが多いので、何が正しくて、何が間違っていると、一概には言えない。一般に普及しているか否かの問題ではないだろうか。

司馬遼太郎の作品には、外国に関して国・都市名の当て字は、使われていなかった。現在では、カタカナで国名を書くのが一般的なので、漢字を使おうとは思わなかったのだろう。その代わり、日本の地名の当て字がある。この当て字は、現在の地名に、日本古来の呼び名のルビをふったものだ。

二、名前の表記

〈三人合計〉

計 一〇 例

沙翁…シェークスピア 該撒…シーザー
 仏得力…フレデリック 維簾…ビルヘルム
 依撒伯拉…イサベラ 基督…キリスト

夏目漱石と森鷗外の作品で使われていた。司馬遼太郎の作品には無い。調べ始めた当初、カタカナの名前には、必ず漢字が当てられていたので、それが明治時代には当たり前なのかと思つた。しかし、色々な作品を調べていく内に、現在と同じカタカナ表記の名前もあることに気づいた。このことから、外国人の名前に漢字を当てることに、特別な理由があつたわけではな
 いとわかる。現在、外国人の名前には、カタカナが用いられるのが普通だ。例外は「基督」である。何故、途中で消えることなく、今まで使われてきたのかは不明だ。世界的に有名な人物であり、明治時代、既に「基督」の当て字が定着していたために、現代まで残つたと考えることもできる。

三、外来語と漢字を組み合わせた当て字

【独自に作られた当て字】

〈夏目漱石〉

計 六二 例

酒精…アルコール 卵糖…カステラ 匙…スプーン
 停車場…ステーション 隧道…トンネル
 石鹼…シャボン 襯衣…シャツ 稜錐塔…ピラミッド
 金剛石…ダイヤモンド／ダイヤモンド（虞美人草）
 ☆洋筆…ペン ☆洋盃…コップ ☆洋杖…ステッキ
 ☆洋袴…ズボン ☆洋琴…ピアノ

〈森鷗外〉

計 一〇 例

棒…キユウ 雛形…モデル 架…スタッフアーヂュ
 冬園…キンテルガルデン 座敷船…ザロンドアルムフエル
 謝肉…カルネワル 加特力…カトリック
 〈司馬遼太郎〉 計 一七 例
 病原体…ビールス 默劇…パントマイム 背後…バック
 斤…ポンド 領事…ミニストル 外套…マンテル
 海霧…ガス 艦橋…ブリッジ
 機関砲・野戦速射砲…ガットリング・ガン
 法家思想家…マキャベリスト

【辞書にのっている当て字】

〈夏目漱石〉

計 一一 例

三鞭酒…シャンパン 麵麴…パン 燐寸…マッチ
 頁…ページ 天鷲絨…ビロード 護謨…ゴム

珈琲…コーヒー 釦…ボタン

〈森鷗外〉 計四例

瓦斯…ガス 骨牌…カルタ 麦酒…ビール

珈琲店…カッフエー

〈司馬遼太郎〉 計三例

羅紗…ラシヤ 浪漫…ロマン 加農…カノン

【表記のゆれ】

〔テーブル〕 ☆洋卓・☆洋机（夏目漱石）／卓（森鷗外）／卓子

（司馬遼太郎）

〔ランプ〕 洋燈（夏目漱石）／油燈（森鷗外）

〔ガラス〕 硝子（夏目漱石・森鷗外）／玻璃（森鷗外）

夏目漱石の【独自に作られた当て字】では、「洋」 という作りの単語が目をついた。その単語には、☆印を付けている。もともと日本には無かったものに使われているようだ。「洋盃（コップ）」を例にあげる。「洋」は、外国（ヨーロッパ）を意味し、「盃」は、元から日本にあるもので、酒を飲むのに用いる小さな器のことを指す。「洋」と「盃」を合わせて、外国から来た「洋盃（コップ）」という言葉（コップは、オランダから来た言葉で、元はワイングラスを指す言葉）になった。他の☆印の単語も同様に考えることができる。

現在、外来語をカタカナ表記するのは、一般的だ。夏目漱石と森鷗外の作品にも使われているところを見ると、明治時代で

も、それが普通だったようだ。ここで特徴的なのは、漢字にカタカナのルビをふって読ませていることである。この方法だと、外国語をあまり知らない人が読む場合でも、漢字から意味をくみ取ることができる。また、日本に元から無いもの（例えば、ズボンなど洋服の類）は、外来語でなければ上手く表現できないだろう。だが、日本語に元からある言葉（例・隧道…トンネル）までも、外来語表記に置き換えているのは、何故か。日本語表記に比べて、外来語表記の方が、洗練されていると感じたり、そのものに対して適切な表現のように思われたためかも知れない。

明治時代に「仮名でわかる言葉には、漢字を用いぬこと」という規則ができた。例としては、「莫大小（メリヤス）」や「唧筒（ポンプ）」など。この規則のために、徐々に漢字と外来語のカタカナルビを組み合わせることは、無くなっていったと考えられる。現代の小説と夏目漱石の小説を比べてみると、その数は格段に減っている。

四、漢字の音を使った当て字

【独自に作られた当て字】

①現在平仮名表記

〈夏目漱石〉 計一〇例

愚図愚図…ぐずぐず 頓痴氣…とんちき

愚迂多良…ぐうたら 伽藍堂…がらんどう

瓦落多…がらくた 閉口たれる…へこたれる

②現在の熟語と一字が同じ

〈夏目漱石〉 計 一七 例

仁参…にんじん(人参)

縁喜…えんぎ(縁起)

焼点…しょうてん(焦点)

演舌…えんぜつ(演説)

有福…ゆうふく(裕福)

一仕切…ひとしきり(一頻り)

〈森鷗外〉 計 二 例

羅致…らち(拉致)

香茶…こうちゃ(紅茶)

③現在は別の漢字

〈夏目漱石〉 計 一一 例

三馬…さんま(秋刀魚)

凡倉…ぼんくら(盆暗)

言逆い…いさかい(諍い)

煮染む…にじむ(滲む)

簀垂…すだれ(簾)

八釜しい…やかましい(喧しい)

調査を開始した当初、①の当て字が、最も当て字らしい当て字だと考えていた。しかし、数が非常に少なく、作品中で使っているのは夏目漱石だけだ。

②の当て字は、夏目漱石と森鷗外の作品にあった。現在使われている(一)内の表記と明治時代の表記を比較してみると、平仮名での表記は同じだが、漢字が違ふといった相違が見られる。現代の漢字に統一されるまでは、色々な表記の仕方があったのだろうか。

③は、現在使われている(一)内の漢字が馴染み深いので、作品中で使われている漢字には、違和感を覚えた。③と①は、漢字の作りがよく似ている。又、両方とも、作品に用いられて

いる漢字表記は、現在ほとんど使われていない。作品中、複数の漢字で表されていた③の当て字は、現在では①のような平仮名表記か、一文字の漢字に短縮されている傾向が見られる。

【辞書にのっている当て字】

〈夏目漱石〉 計 二〇 例

変挺…へんてこ 弥次馬…やじうま

果敢ない…はかない(儼い)

剣呑…けんのん 出鱈目…でたらめ

素っ破抜く…すっぱぬく

〈夏目漱石・司馬遼太郎〉

歌留多…かるた

この当て字は森鷗外の作品には無かった。司馬遼太郎の作品にも「歌留多」一つしかない。私の読んだ現代の小説では、この種の当て字には漢字(熟語)を使わず、代わりに平仮名やカタカナで表記していることが多かった。よく覚えているのは「剣呑」を「けんのん」と表記している小説があったことだ。平仮名だけをを用いると、他の平仮名と混ざってしまつて読みにくい。ため、平仮名の脇に「……」をふつて、読者の注意を促していた。

明治時代にできた規則の一つに「一、仮名でわかる言葉には漢字を用いぬこと」(イ)わが国音の動詞、形容詞、助動詞、副詞、感嘆詞、後置詞、等」とある。この規則ができて以降、当て字の数が目に見えて減り始めたのではないだろうか。

五、熟語と大和言葉を組み合わせた当て字

【辞書にのっていない当て字】

①副詞

〈夏目漱石〉 計 一九 例

確乎…はつきり 恍惚…うつとり 歴然…れっき(歴き)
 慄然…ぞつと 朦朧…ぼんやり 故意…ことさら(殊更)

②熟語とルビの漢字が異なる(同義語・類義語)

〈夏目漱石〉 計 二八 例

平常…ふだん(不断・普段) 伶俐…りこう(利口)
 家計…くらし(暮らし) 往復…ゆきかえり(行き帰り)
 模擬…まがい(紛い) 虚言…うそ(嘘)

〈森鷗外〉 計 一例

親族…みうち(身内)

〈司馬遼太郎〉 計 二八 例

容貌…かお(顔) 武器…えもの(得物)
 過去…こしかた(来し方) 秘訣…こつ(骨)
 冤罪…むじつ(無実) 現実…ありよう(有り様)

③熟語とルビの漢字がだぶっている(同義語・類義語)

〈夏目漱石〉 計 四二 例

危険…あぶない(危ない) 幻影…まぼろし(幻)
 効果…ききめ(効き目) 侮蔑…あなどり(侮り)
 閑静…しずか(静か) 依頼…たより(頼り)

過失…あやまち(過ち)

悲惨…みじめ(惨め)

美麗…きれい(奇麗)

〈森鷗外〉 計 七 例

下女…はしため(端女) 周囲…まわり(周り)
 背後…うしろ(後ろ) 生活…なりわい(生業)
 主人…あるじ(主) 任務…つとめ(務め)

〈司馬遼太郎〉 計 一二 例

低声…こごえ(小声) 郊外…はずれ(外れ)
 収入…みいり(実入り) 威圧…おし(押・圧し)
 弾丸…たま(弾) 騎乗…うまのり(馬乗り)

①は、現在では平仮名で表記するのが、一般的になっている。この当て字は、夏目漱石の作品だけにあった。平仮名だけで書くよりも、同じ意味の熟語にルビをふって読む方が、意味がわかりやすいという利点がある。

次に、②と③を比較してみる。

まず、違いがあるとすれば、数の多い、少ないだろう。作者別に見てみる。

夏目漱石と森鷗外の場合、②よりも③の方が、数が多い。司馬遼太郎は、逆の結果である。これは、夏目漱石と森鷗外の二人と、司馬遼太郎が作品を書いた時代が、違っているからだろう。司馬遼太郎は、③のような当て字をあまり好まないようだ。熟語をそのまま読んでも構わないと、考えていたのかも知れない。司馬遼太郎以外の現代の小説を読んでも、どちらかというと③より②の当て字の使用率が高い。

②の当て字の夏目漱石・森鷗外と司馬遼太郎のルビのふり方を比較してみる。司馬遼太郎の当て字の方が、普段話すときに使うような、くだけた調子のルビが多いようだ。夏目漱石や森鷗外の当て字は、熟語と大和言葉のルビを組み合わせている。この場合、それぞれの言葉の持つ意味が、ほとんど同じだと思われる。

今回の調査で集めたこの資料だけで、判断することは難しいが、時が流れるにつれて、②や③の当て字は、徐々に変化しているのではないか。特に②だが、大和言葉から会話の口調にルビが変化しつつあると思われる。時代とともに、文章の書き方も違ってきているだろうから、当て字に変化があってもおかしくはない。これからの小説には、③の当て字よりも②の当て字が増えていく可能性が高いと考える。

【辞書にのっている当て字】

〈夏目漱石〉 計 七二 例

蕎麦…そば 銀杏…いちよう 蟋蟀…こおろぎ
黄昏…たそがれ 何時…いつ 時鳥…ほととぎす
身体…からだ 陽炎…かげろう 明日…あした
長閑…のどか 一寸…ちよつと 悪戯…いたずら

〈森鷗外〉 計 一七 例

鍛冶…かじ 松明…たいまつ 南瓜…かぼちゃ
煙管…きせる 去年…こぞ 終日…ひねもす
煙草…たばこ 草鞋…わらじ

〈司馬遼太郎〉 計 二六 例

旅籠…はたご 東雲…しののめ 悪戯…いたずら
気質…かたぎ 強請…ゆすり 紫陽花…あじさい
泥濘…ぬかるみ 火傷…やけど

この当て字は、漢字を見ることで、その熟語が何を表現したのかを理解できるものが多い。しかし、漢字の音や訓に全く関係ない読み方をするので、馴れるまで、ルビが無い状態で読むのは難しいだろう。小さい頃に、生活に必要なものとして学ぶのではなく、年を重ねるに従って、言葉や表現の幅を広げるために、吸収していくものではないか。

項目三、四、五のそれぞれに【辞書にのっている当て字】があるので、その数を比較してみると、項目五のものが最も多い。これほどの数の当て字が一般化されるまでには、かなりの時間を要したはずだ。そう考えると、この当て字は、随分と古い時代から存在していた可能性が高いように思われる。

この熟語で、この読みが当たり前だと思えるほど、古い時代からある、馴染み深い当て字なので、現在でも小説などに数多く使われているのではないだろうか。

【辞書にのっていない〔熟語+送り仮名〕の当て字】

①動詞

a、現在の漢字表記と異なっている（同義語・類義語）

〈夏目漱石〉 計 一六 例

邂逅…めぐりあう（巡り合う）

私語く…ささやく（囁く）

適合る…あてはまる（当て嵌まる）

空虚う…がらんどう

〈司馬遼太郎〉 計 七 例

相談る…はかる（諮る）

露頭る…ばれる

b、漢字が余分にだぶって入っている（同義語・類義語）

〈夏目漱石〉 計 一二 例

謝罪まる…あやまる（謝る）

蘇生る…よみがえる（蘇・甦る）

軽蔑る…さげすむ（蔑む）

威嚇かす…おどかす（脅・威・嚇かす）

〈司馬遼太郎〉 計 四 例

眩惑む…めくるむ（目眩む）

誕生れた…うまれた（生まれた）

②形容詞

〈夏目漱石〉 計 六 例

柔和しい…やさしい（優しい）

過酷しい…きびしい（厳しい）

〈司馬遼太郎〉 計 一 例

温和しい…おとなしい（大人しい）

③その他

〈夏目漱石〉 計 五 例

失策った…しまった 故意と…わざと（態と）

〈司馬遼太郎〉 計 一 例

脱藩け…くにぬけ（国抜け）

この当て字は、私が当て字に興味を持つきっかけとなった「伝染るんです」と同じ種類のものだ。調べ始めた当初、これだけの数が集まるとは思わなかった。現代の小説ならではの当て字だと考えていたので、夏目漱石の作品の中に数多く用いられていたことは、意外だった。森鷗外は、この当て字を使っていない。

日本語（大和言葉）は曖昧だ。例えば「うつる」で考えてみる。「うつる」には「移る」「写る」というように、少なくとも二つの漢字がある。どちらの「うつる」なのか判断するためには、前後の文章を読む必要がある。「風邪がうつる」と書いてあれば「うつる」が「移る」であり「伝染する」の意味だとわかる。この当て字の利点は、それを一目で理解できるように「伝染る」と書き表せるところだ。

資料を見ると、動詞が最も多いことがわかる。日本語（漢字）の性質上、動詞だと送り仮名がつくのが当然なので、動詞の数が多いのは不思議ではない。形容詞も同様だ。反対に言うと、熟語を動詞や形容詞の当て字として使う場合、元が熟語であっても送り仮名をつけたいと思うのが、日本人の自然な感覚なのだろう。

【熟語に送り仮名・辞書にのっている当て字】

〈夏目漱石〉 計 六 例

矢張り…やはり 草臥れる…くたびれる

流離い…さすらい 不味い…まずい

何故して…どうして 周章てる…あわてる（慌てる）

〈夏目漱石・森鷗外・司馬遼太郎〉 計 四 例

容易い…たやすい 可笑しい…おかしい

逆上せる…のぼせる 流行る…はやる

辞書にのっていない当て字は多かったが、辞書にのるほど一般的になるものは、かなり少ないようだ。当て字の作りは、熟語に送り仮名が基本だが、「可笑しい」のように、漢文から直に持つて来たのではないかと思われるものもある。

六、表記のゆれ

【ルビ（読み方）のゆれ】

〈夏目漱石〉 計 一一 例

機会…おり（折り）／しお（潮）

理由…わけ（訳）／いわれ（謂われ）

平生…いつも／つね（常）

露骨…あらわ（露わ）／むきだし（剥き出し）

〈司馬遼太郎〉 計 四 例

将来…さき（先）／すえ（末）

面妖…おかしな（可かしい）／みょう（妙）

現代…こんにち（今日）／とうせつ（当節）／いま（今）

ルビのゆれは、作者がその場面に適した大和言葉をルビにしたために、起こったことだと考えられる。調査していく内にわかったことだが、熟語とルビの組み合わせは、作者ごとに、ある程度決まっていたようだ。だが、場面によっては、作者が自分で決めた当て字の枠にとらわれず、臨機応変に熟語とルビの組み合わせを変えることも、必要だったのではないだろうか。

【熟語のゆれ】

〈夏目漱石〉 計 一六 例

いわれ（謂われ）…理由／由緒

あたま（頭）…頭脳／冒頭

なり…身体／服装／身長

いき（息）…氣息／呼吸／呼息／生息

〈司馬遼太郎〉 計 一一 例

わらう（笑う）…微笑う／破顔う／破笑う

やる…斬る／襲る／討る／殺る／闘る

作者による表記の違い

しるし（標・印）…証拠 〈夏目漱石〉／印可・象徴 〈司馬

遼太郎〉

つや（艶）…光沢・色彩 〈夏目漱石〉／沢 〈森鷗外〉

ここでは、司馬遼太郎の「わらう」を例にあげてみる。「微笑

う／破顔う／破笑う」の三つの書き方があった。「微笑」は『ほえむこと』、「破顔」は『顔をほころばせて笑うこと』と辞書にある。大和言葉の「わらう」だけでは、どう笑っているのかわからない。よって、熟語と大和言葉を組み合わせた当て字を使うことで、どのように「わらう」のかを表現したのだろう。「破笑う」は、「微笑う」と「破顔う」を組み合わせたものだと思うわれる。他のものも、これと同様の解釈ができると考える。

表記のゆれは、日本語（大和言葉）の曖昧さのために起こるのだと思う。ここで扱った表記のゆれは、ほんの一部でしかない。他にも沢山あるが、代表的な例として以上のものを紹介した。

—おわりに—

夏目漱石、森鷗外、司馬遼太郎。三人の作家を調査したが、森鷗外の作品は、短編が多かったため、他の二人に比べると、当て字の数が少ない。また、同じ明治時代の作家でも、森鷗外と夏目漱石の当て字の使い方には、違いが見られた。このことを考えると、調査の対象を明治時代の作家に限定して、その時代の当て字について、より深く調査しても良かったのではないかと思った。しかし、司馬遼太郎を調べたことで、時代による当て字の種類の变化を見ることができたのは確かだ。当て字は、作家の生きた時代や、作品の書かれた時代、又は、作品の中で扱った時代によって、かなり左右されるものらしい。

当て字を調べようという漠然とした考えから、この調査は始まった。結果として、当て字を種類別にわけるといった作業が

大半だったので、ここでは、当て字の種類の方に焦点をあてている。特に、分類した中でも、数の多かったものを扱った。他にも、ここでは取り上げなかった数多くの当て字が、資料として残っている。冒頭に、当て字とはどのようなものを指すかを述べたが、実際に集めた資料と照らし合わせると、どこまでを当て字として見ればいいのか、判断に迷ったところもあった。しかし、今回、このようにまとめることで、自分なりの分類と分析ができたのではないかと思っている。

【参考文献】

夏目漱石

吾輩は猫である／行人／虞美人草／こころ／坊ちゃん

森鷗外

舞姫／阿部一族／うたかたの記／鶏／かのよう

司馬遼太郎

燃えよ剣（上・下）／新撰組血風録

旺文社

国語辞典

改訂新版

三省堂

新明解国語辞典

第五版

旺文社

古語辞典

新版

小学館

大辞泉

増補・新装版

大辞林

第二版

明治以降の漢字政策

井之口 有一 著

当て字の辞典

（いとう こうこ・一九九九年卒）